

金箱温春・ 四半世紀ごとの使命

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■金箱塾

お洒落な男性は、一流の仕事ができる。清潔感のある小粋でSHOWAな雰囲気金箱温春先生が、実証している。「内の家」(本誌2013年5月号掲載、設計:坂牛卓)にお見えになったときの印象です。躯体が見えるうちに、写真家の大野繁さんに急遽撮影してもらった、弊社施工のRC造の現場でした。また、木造住宅は所員にお任せと思っていたら、タイミングを外さずに現場に現れる。現役での仕事を通して、構造家のあるべき姿を実践されている先生です。

若い構造家に、「現場を見なさい」と言う。図面でわかっているつもりでも、実際に見るスケール感から、必ず「発見」があるはずだから。所員やOBだけでなく、構造を専業にしている若い設計者を招いての事務所の忘年会。皆に一年の仕事を発表してもらう。立場を超えて、伝えなければ……、の思いが、金箱温春先生を突き動かしているようだ。

■先達は偉大

構造は単なる技術ではなく、文化性や芸術性の創造に寄与するものと言う横山不学先生の元に入所。構造設計図書には必ず署名捺印した偉大な師と、構造の中に詩があると言った木村俊彦先生のお二人を尊敬する。工事看板に事務所の名前がないと、現場に行かなかったという木村先生とは27歳違いで、横山先生はさらに24歳上。構造設計者の社会的立ち位置をつくった先達の活動があればこそ、今があると思う。

覇志堂の、「運がいいですねえ」の相槌に、「苦勞もして

います」と微笑む。横山事務所在籍時に仕事のない時には、師匠たちの書かれたものをまとめることに没頭。血肉となることを黙々とやってきたという、深い自信を感じます。二人の師と四半世紀ごとの年齢の違いを、縁と感じ、責任と捉える。JSCAの会長として4年、全国の構造家の裾野まで見つめて動く、構造家・金箱温春。

■バランスとプロセス

構造設計において、一つのプロジェクトを、その一つで終らせない。次に反映していく設計姿勢と理解。構造家は建築のイメージを理解し、力学や構造的な技術で判断していくから、バランス感覚が重要だ。また、構造設計におけるプロセスという意識で単発で完結するのではなく、別のプロジェクトで建築家が違っても、「しめしめ」の気構えで、自分のテーマを育てていこうじゃないか。

全国で現場が動いているし、計画中を合わせて40件くらい抱えていて、「いつも切羽詰まっている」とおっしゃる。その移動の時間は執筆や息抜き、というから、時間の使い方が天才的なようですね。

■夢

これから巣立って、全国に拠点を構えていく所員さんたち。金箱先生は、彼らがその地域の芯になって、日本の構造界の未来予想図を埋めていってくれるのが「夢です」とおっしゃる。

「今、歴史に興味があって、この本を読んでいるのですよ」と見せてくださった洋書。構造計算などし

ないで建物をつくっていた時代の構造の歴史書です。遥か三千年前のローマやギリシャのエンジニアリングに興味を湧いている。

同時に、職能としての歴史にも、大いに興味がある。速水清孝さんが書いた『建築家と建築士』(2011年、東京大学出版会。2014年日本建築学会著作賞、第17回建築史学会賞)を読んで、ウキウキしておられる姿は、構造の落し子のようにもあり、伝道師のようにもあります。

